

ゴルフコースと樹木 コース設計者が考える樹林(帯)修復

コース設計家

嶋村唯史氏

大洗ゴルフ倶楽部グリーンキーパー

小野瀬貴之氏

サニーク代表取締役

小林祐治氏



(左から) 小林祐治氏、小野瀬貴之氏、嶋村唯史氏

2019ジャパントーフショー開催期間中の11月7日(木)に、一季出版プライベートセミナーを開催し、定員50名を上回る参加をいただいた。

セミナーのテーマは「コース設計者が考える樹林(帯)修復」。コース設計家の嶋村唯史氏をお迎えし、ゴルフ場における樹木の伐採について講演していただいたほか、嶋村氏が監修を手掛けた長野県のサニークントリークラブの小林祐治社長、茨城県の大洗ゴルフ倶楽部の小野瀬貴之キーパーを交え、設計家・経営者・コース管理者の視点から意見交換も行われた。当日の様子は誌面にてお伝えしたい。

嶋村 本日はお集まりいただき、ありがとうございます。日本ゴルフコース設計者協会の嶋村です。よろしくお願います。

ゴルフ場の樹木を伐るということについて、コース設計者と相談しながら作業を進めていくということを、多くのゴルフ場がしていないと思います。一度コースを見回ってアドバイスをもらい、あとは自分たちでやるというゴルフ場が多いのではないのでしょうか。

今回は私が考える樹林・樹木整備についてお話ししたいと思えます。樹木管理をしていく中で、困った時の参考にさせていただければと思います。

樹木の役割と課題

本日のテーマである樹木についてですが、「ゴルフ場に樹木があるのは当たり前」という考えは、間違いです。樹木がなくても、世界のトップランキングに名を連ねるような素晴らしいコースはたくさんあります。ゴルフ発祥の地はもともと樹木が生えない土地柄で、セントアンドリュースにもほとんど木はありません。樹木の存在がコースを美しく魅せたり、戦略性を高めたりすることは事実ですが、樹木があるかないかで、ゴルフ場の良さが左右されることはありません。

コースには「役割を明確にしている樹木」というのがあります。例えばドッグレッグのコーナーポイントに立つ樹木は、ホールの戦略性を強調するという役割があり、そのことを認識した上で、どのように手を入れるかを考えなければいけません。

講演会テーマ 『ゴルフコースと樹木』

【主題】 コース設計者が考える樹林（帯）修復

1. 樹木の役割と課題

- ① 自然を生かしたコース造りの原点と先人の知恵
- ② ゴルフコースと日本の美意識
- ③ ゴルフコースの動脈硬化

2. 樹木の成長とコースデザイン

- ① 樹木は育てる時代から伐る時代へ
- ② コースに生きる2つの道（呼吸と血管）
- ③ 芝の育成環境の整備と改善
- ④ コースデザイン（景観修景）

3. 今後のゴルフコース樹木管理の考え方

- ① 優先的樹木整備の実践
- ② 樹木整備プロジェクト
- ③ 樹木整備パターン

4. 実証例：大洗ゴルフ倶楽部

（2019年茨城国体・ゴルフ競技会場）

5. ゴルフ場のポテンシャルを引き出す経営

サニーカントリークラブ

所に樹木を植えて本来必要なハーブの能力を失くしたり、そういうことが再三、日本のゴルフ場では起きています。

近年は開場して50年以上経過したコースが増えてきました。樹木にも様々な弊害が出ており、多くのゴルフ場が樹木管理を見直す時期に入ってきていると思います。

樹木が25メートルくらいの高さに成長すると、日陰が多くなりま

す。フェアウェイの両サイドが樹林帯であったなら、地面はほぼ日陰だらけです。そういう場所の樹木の下の部分には、日の光がほとんど入りません。芝は枯れ、木の

下の部分がベアグラウンド、いわゆる土がむき出しの状態になり、地盤が枯渇して、地面がツルツル

になります。そうなると再び芝がつくことはなく、地盤改良からやらないといけません。ターフコン

ディショナーで耕うん作業をしないと、生き物が育つ環境には戻らないのです。樹木には根上がりも

発生します。値上がりはプレーに支障をきたすので、その一帯はプレーゾーンですらなくなります。

樹木の成長を放置してはいけません。そうなる前に、整備が必要

です。支障木を整備する際には、優先順序というのがあります。

今すぐ対応するべきものは、芝生の日照を妨げる樹木（日照遮断）、芝生の通風を妨げる樹木（通風阻害）、台風などの幹枯れ、寝返り樹木（安全対策）です。

とくに日照遮断と通風阻害は、至急対応しないと芝の生育環境がおかしくなるので、早めに計画を立てて、ゾーンごとに整備していく必要があります。

樹木の成長とコースデザインについて

ゴルフ場に植えた樹木は、最初の5年〜10年は養生期間、続く10年は育てる期間、その後の10年が手入れをしていく期間です。樹木を植えて40年くらい経過したところ、ようやく美しいゴルフ場が完成します。

ところが50年を過ぎると、樹木が美観やコンディションにイタズラをしはじめます。芝への影響も出始め、排水機能も悪くなります。日陰になる範囲が増え、根上がりも出てきます。「景観がいいのだから下手に樹をいじるな」というのは間違いで、いい景観を維持す

フェアウェイの真ん中に立っているような独立樹は、ハザードの役目を果たしていて、見えない着地点へのショットを助けています。この木のどこを狙って打てばベストショットになるかというのを暗示するための独立樹です。

また、樹木には四季の美しさを醸し出すという役割があります。景観はとても大事です。ゴルフ場によくある松や池が入り込んだ景色は、日本人の美意識として私た

ちの文化の中に潜在的にあるようです。私が携わった山梨県の鳴沢ゴルフ倶楽部は富士山を借景に入れ、池と原生林を生かした景観の美しい設計になっています。

このように、ゴルフ場の樹木はそれぞれに役割を持っているので、伐採する時、整理をする時は、その役割を理解した上で取りかからないとおかしな結果になります。設計者が残しておきたいと言った樹木を伐つたり、適切ではない場

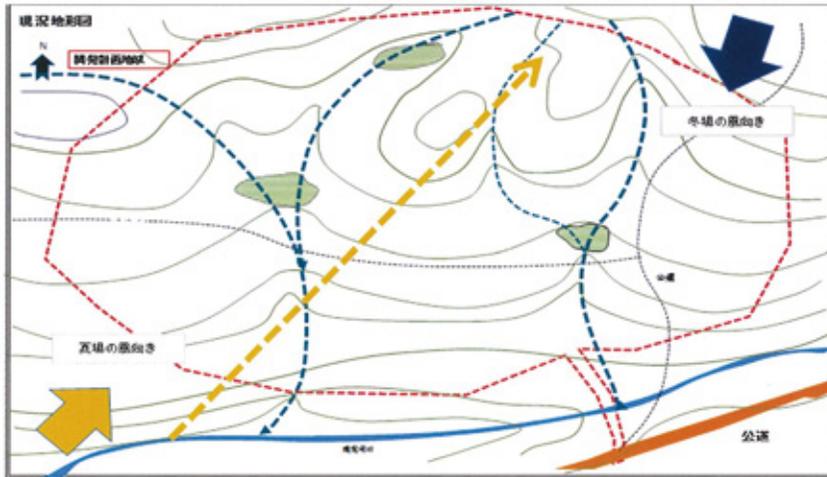


図1 コースの原形(二つの道)



「風の道と水の道は決して変わらない、ゴルフ場はそのことを知っておかない

井上誠一氏も「風の道と水の道は決して変わらない、ゴルフ場はそのことを知っておかない

計者はその土地の地形図を理解します(図1)。南傾斜の斜面で、水路から水が流れ込む川、農家が使

「風の道をつくる」
樹林帯を整備はどのようにしたらよいでしょうか(図2)。
「風の道をつくる」という考え方があります。テイニングエリア、グリーン、IP、芝のコンディションが一番求められるこれらの部分には、風が通らないといけません。では、「風の道」はどうつくればよいのでしょうか。
ゴルフ場の周辺地形図と気象データを参考にします。風はどの方

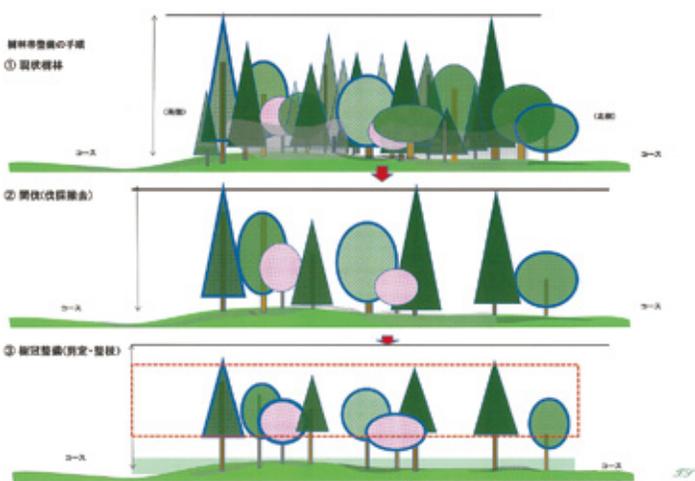
たえゴルフ場が出来上がっても、「風の道」と「水の道」は変わらずに存在します。そのことを知らずに、あるいは無視してコース管理をすると、効率が非常に悪くなります。また、元の地形を知らずに水の道を変えたり、塞いだりすると災害を起こします。
戦前からの日本のゴルフ場といえば砲台グリーンがほとんどですが、それはなぜかというと、当時は良い排水設備がなかったため、グリーンを大事にするためには砲台という形にせざるを得なかったからです。今となればデザイン的にも素晴らしい要素で、砲台の小さい1グリーンは非常に戦略的で難しい。先人の知恵と見直されています。

人間の体に例えるなら、風の道は呼吸器官、水の道は血管です。風は呼吸を整え、血管は栄養を運びます。
排水も重要です。戦前からの日本のゴルフ場といえば砲台グリーンがほとんどですが、それはなぜかというと、当時は良い排水設備がなかったため、グリーンを大事にするためには砲台という形にせざるを得なかったからです。今となればデザイン的にも素晴らしい要素で、砲台の小さい1グリーンは非常に戦略的で難しい。先人の知恵と見直されています。

図2 林帯整備の考え方



図3 樹林整備の手順



を理解しましょう。

風の道をつくるには、樹林帯を整備しなくてはいけません(図3)。育てる時代から伐る時代に移った樹林帯では、余分な樹木は伐採するべきです。それも自分たちで管理できる範囲で伐ることです。間伐をして、木の上の部分をおット、下枝を整理する、剪定と整枝です。

いない、伸びても通れるような範囲の幅が適性です。樹林帯を整備して風の道をつくることで、地表近くにも風が流れるようになります。真夏の暑い時の地表温度も変わってくるでしょう。

コース改造の基本概念

これからのゴルフコースの樹木管理は「適数管理」が基本です。将来的に人手不足の問題もありますので、樹木の本数を減らしていかないと、コース管理スタッフだけでは手に負えなくなります。コース改造の基本概念には、

- Restoration (復元)
 - Renovation (改修)
 - Upright Remodeling (完全改造)
- という三つの大きな考え方があります。

「樹木を伐る」ということ、それはRestoration (復元) です。単に伐るということではなく、大きな前提として「コースの復元」というテーマが存在します。樹木の整備はコース改修の一環であるということ、皆さんに認識していただきたいと思います。

角から流れているかということや、地形や樹林帯がどのように影響しているかなど、コース全体の風の流れを把握することができます。まずは知ることです。

一番やっつけないのが、人

の感覚で風向きを決めることです。「このホールはこつちから風がくるからこの樹木を伐りましょう」というのは、その瞬間の単なる対応であり、そのホールだけの風を感じても意味がない。ゴルフ場全体にどう風が入りこんで、どこへ抜けていくのかをデータとして知ることが重要です。まずそれ

木の高さを測り、日陰がどのようになれるか、夏至と冬至のときの、日陰の長さの差はどれくらいあるのかを知る必要があります。樹間については、枝が混みあわないうようにするのは当然ですが、乗用芝刈り(ラフ) 機械が木と木の間を通ることができて操作もできることを確認してください。木の根上がりもなく、変な枝が伸びて

大洗GCグリーンキーパー
小野瀬貴之氏

開場して6年の大洗GCですが、樹木についてはほとんど手をつけていない状態です。というのも沿岸地区にあるためコースの樹木は防風林、防災林という役割もあり、また国定公園内ということで、ゴルフ場独自の判断で木を伐ることのできないのです。

プレーに支障をきたす木も出てきており、嶋村先生に相談しています。危険木やプレーする上で問題があると思われる木を指摘していただいて、伐採する方向で決めていきたいと思っていますのですが、なかなか前に進まないという状況です。メンバーさんの多くは「木を大事にしたい」という考えをお持ちなので、ご理解をいただくのはなかなか難しいです。

嶋村 小野瀬キーパーには、風の道をつくるルートも提案しています。大洗GCを設計した井上先生は南北の方向にコースをレイアウトして、風の道がコースの中を通過していくように存在しています。現状の樹林帯を整備して風の通り道をあけてあげれば、よい風の流れができます。

サニーCC代表取締役社長
小林祐治氏

サニーCCの経営を引き継いで4年目になります。2年前に嶋村先生とお会いし、他とは違う、他にはないゴルフ場を造りたいということを相談させていただきました。まずはマスタープランを作成し、練習場を作つて、コースにも手をいれて、木の伐採についてもマスタープランに基づいて予算の範囲で実行し、現時点で500本くらいの木を伐りました。

もともと27ホールのゴルフ場だったのですが、将来的にゴルフ場利用者も少なくなるだろうと予想して9ホールを閉鎖し、新規に300ヤードの練習場をつくり、2019年6月にオープンしました。まだ途中ですが、予算を作りながら、マスタープランに近づけていくように頑張っています。

嶋村 サニーCCはもともと「ザ・日本のゴルフ場」という雰囲気でしたが、潜在要素はありましたし、小林社長の「いままでがないものをつくりたい」という思いと、みんなの知恵を持ち寄つて、いいものをつくりたいという気持ちで取り組んでいます。



●質疑応答コーナー●

新沼津CC

渡辺グリーンキーパー

当クラブも53年目を迎え、樹林帯もだいぶ大きくなっています。お聞きしたいのはベアグラウンドの部分に関して、土壌改良をくわ

えなければ植生が維持できないというのであれば、裸地は裸地として管理していくという考え方は、いかがなものでしょうか。

嶋村 ゴルフ場には芝が無ければいけないという決まり事はありません。でも、それを知らない方は意外に多くて「芝生を貼ればいい」

と簡単におつしやいます。でも、裸地の状態から芝生化するには、ものすごいエネルギーが必要で、何をしても植物が育たないところには育たないので、思い切つてベアグラウンドをウエストエリアに切り替えて砂地にし

ちやうとか、きちんとデザインをして、景観もよくして、プレーヤーに満足していただければ、それはそれで間違いではない。日照、土壌改良、問題はいろいろあるので、裸地は裸地として管理したいという考えに、私は賛成します。

.....
嶋村さん、小林社長、小野瀬キーパー、ありがとうございます。参加していただいた皆様、最後までご静聴ありがとうございました。当日お配りした資料をお読みになりたい方は、編集部までご連絡ください。